

ともに生きる

認知症70万人の時代

第3部「寄り添う医療」⑧

人材育成

メモ

認知症に関する医療や介護の相談は、各市町村の地域包括支援センターで受け付けている。徳島市では、市の委託を受けた市医師会がセンターを運営し、社会福祉士や保健師、主任ケアマネジャーなどの専門職が、介護に関するアドバイスや認知症の治療が受けられる病院などを紹介している。問い合わせは同センター〈電0120(24)6423〉。

ゴーグル型の端末を着けると、ビルの屋上に立っている自分がいた。転落しそうで、足がすくむ。にもかかわらず、付き添いの介護職員から「さあ、足を出して」「大丈夫ですよ」と促される。ついに屋上から落ちたと思っただけで、我に返ると乗っていた車から降りるところだった。

疑似体験し症状理解

距離感覚が分からなくなかった。怖がっている人がいたら、何が怖いところなのか具体的に聞くようという。

今年3月、徳島大学病院でVR体験会があった。体験会を主催した県内、県内の医療、福祉関係者が認知症の症状を疑似体験した。参加した牟岐町地域包括支



ゴーグル型の端末を着けて認知症の症状を疑似体験する県内の医療関係者。患者の困り事や不安を理解し、適切な治療とケアにつなげる。徳島大学病院

史医師(54)は「妄想や幻覚といった症状を抑えられれば、認知症になっても自分らしい生き方ができるし、家族の負担軽減にもつながる」と強調する。

ただ、県立中央病院で診られる患者はほんの一部だ。認知症専門医も、県内には数えるほどしかない。超高齢社会に備えるには、全ての医師が認知症に対応できる環境整備が欠かせない。

大森さんは「医師の間では『全人的医療』という言葉がよく使われる。病気だけを診るのではなく、患者の体や心、人格などを含めて、一人一人に合った医療を提供するということだ。それは認知症の治療にこそ求められる姿勢だと、肝に銘じている。(山口和也) 第3部おわり

連載へのご意見、ご感想をお寄せください。宛先は〒770-8572(住所不要)徳島新聞社社会部。ファクスは088(654)0165。電子メールはsyakai-bu@topics.or.jp